

開催地名：静岡県下田市	
開催日時	令和元年 11 月 6 日（水） 19:00 ～ 20:30
開催場所	下田市民文化会館
語り部	松田 富子 （岩手県遠野市）
参加者	下田市、自主防災会連絡協議会、地域住民 約 200 名
開催経緯	住民の防災対策に対する意識格差があり、特に防災訓練等の高齢化率が高く、若年層の参加率が低下している。また、災害が起きた際に自分が何をすべきか、どこに避難すべきかわからない方が多かったり、普段からの防災対策や備蓄が進んでいない等の課題を認識しているため、語り部のお話を今後の防災活動に役立てたい。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>私が以前所属していた遠野市婦人消防協力隊を紹介させていただく。まず、婦人消防協力隊とは、婦人の自主防火思想の啓発を図り、相互の協力で火災予防のための普及啓発に努め、安全で住みよい郷土づくりに貢献する組織である。簡単に言えば、まず自分の命は自分で守る、それが家族の命、地域住民の命を守ることにもつながる。そして火災は出さない、そのような心意気で頑張っている組織であると思う。</p> <p>東日本大震災発生時、私は遠野市婦人消防協力隊 430 名の隊員をまとめる隊長であった。隊長として、後方支援活動の先頭に立ち、被災地支援や市内に拠点を置く全国からの警察検視隊の活動支援を行った。</p> <p>（２）東日本大震災の支援・協力活動</p> <p>遠野市は、人的被害はなかったが、市役所庁舎は中央の柱が粉碎し、中では仕事ができないために、テントを張って業務にあたった。震災直後、婦人消防協力隊は主に炊き出しを行った。地震後すぐ、遠野市全域で停電になり、不便を感じた。それでも婦人消防協力隊の隊員に集まってもらい、停電で電気釜が使えなかったため、5 個のガス釜で 18 升のコメを毎日 6 ～ 7 回炊いていた。みんなで「熱い、熱い」と言いながら、ろうそくの灯りのもとで一生懸命おにぎりを握った。毎日遅くとも 14 時までには作り、それを市役所経由で被災地に届けた。普段から、何かあったら協力隊は協力するという意識があったので、隊員たちが文句も言わずに一生懸命協力していたことが思い出される。</p> <p>そして、九州、北陸、関東に所属する 9 警察本部の検視隊を受け入れ、平成 23 年 3 月 15 日から 6 月 28 日の 3 か月以上、多いときは 8 人以上に、炊き出しをした。検視隊は、寒い日が続く中、仕事を終えて帰ってくるのが夜の 9 時になっていた。そんな方のために何かできないかと思い、地域の方々が持ってきてくれた材料で、豚汁、けんちん汁、遠野の名物のひつつみ、煮つけ、唐揚げ等を差し</p>

入れた。平成 23 年 8 月には、協力隊は千葉県警から感謝状をいただいた。さらに 滞在した県警の方々からはメッセージをいただいたり、遠野市に来たとき手紙や色紙を持って立ち寄ってくれたり、そのあとも交流が続いており、これからも震災をきっかけにできた絆を大事にしていきたいと思う。

(3) コミュニティの役割

大災害が発生したときには、公助は遅れる。もしくはまったく役に立たない。自助、共助が基本である。自助とは、災害時に必要な用具の準備（懐中電灯やラジオ等）、家具の転倒や物の落下の防止、災害用伝言ダイヤルの使い方、災害時の連絡先や連絡方法の確認等である。公助とは、避難情報の発信、火災警報器・消火器などの設置、避難所の開設等である。共助とは、地域皆で協力することである。東日本大震災や阪神・淡路大震災では、あまりにも規模が大きくて、援助隊や救急隊がすぐに来られなかった。そのような状態でも地域の人たちが助け合い、救われた人がたくさんいた。災害に備えて自助、共助の考えを大事にして、地域で支え合い、声をかけ合い、災害に負けないまちづくりができるよう、地域の防災行事に参加し、防災意識を高めてほしい。そして将来、自分たちが地域を支える中心となって、いつ来るか分からない災害に備えてほしい。



開催地より

遠野市婦人消防協力隊としての支援活動を始め、遠野市の方々の後方支援活動について詳しくお話をいただいた。その温かい支援によって、多くの方々が癒されたことと思う。貴重なお話に感謝し、今後の防災活動の糧としたい。